

## 還曆に思う 無常



滝田医院

滝田 有 (気仙医師会)

還曆を迎える前に二度死に損なった男も珍しいだろう。30代に母そして父を亡くした。40代の始めに開業し、終わりに大病で倒れた。派手なクモ膜下出血だったから医療の介入なくしては死んでいた。50代の始めに3・11大津波に呑まれた。引き潮の刹那に脱出できなければ死んでいた。

「生きていても何も良いことはない」と家に通うお年寄りには皆そう言う。「んだかもしんねえなあ」と力なく答える、「んじゃあ、若くして死んだ方が良かったのか」と本当は聞き返したいところだ。押し売りは出来ないが、二度の死線を潜り抜けて今生きているのをありがたく思っている自分が居る。満57歳で亡くなった母親はさぞ無念であったろう。

死線を超えて暫くは「欲」と無縁になる。日常を生きるだけで幸せと感じるからだ。大病から復帰した時は、仙台から車を運転したどり着いたわが家で診療を再開したこと自体が嬉しかった。大津波の後は岩手山を眺めただけで涙が出た。温泉でウグイスの声を聴き、忘れていた春を実感した。

このままいくと仙人になれるかも、と思ったのも束の間、生き続けると欲は出てくる。「何か面白い事ねえかなあ」が口癖になり、「何も無いのが幸せなのよ」と妻に窘められる。昨年名古屋に招かれ講演した。三次会は会場のホテルを出て随一の繁華街「錦」へ。案内されたのは高級クラブできれいなお姉さんが沢山いた。大病以来この手の店は避けていた。仙人になり損ねた自分にはハードすぎると思ったのだが。それが意外と、というよりも正直非常に楽しかった。

人は死と隣り合わせの危うい存在ではあるが、だからこそ無常観をもって精一杯に生きるしかないのだろう。還曆を迎えるに当たりそう思った。